〈失策と訂正〉

フロイトの「精神分析入門」は、私たちが日常的にやっている間違い＝失策行為への言及に始まる。

どの領域でもそうだと思うが、入門書の善し悪しを初心者が判断するのは難しい。何度も立ち返りたくなるものは多くない、ということは結果として言える。この本をふと読み返す気になったのがどうしてだか実のところ分からない。門外漢であるばかりか、５０数年つきあっている自分という意識についても初心者の域を出ないような者が何度読んでも消化できるしろものではあるまい。しかし、重大な事物が小さなしるししかあらわさないことがあり、一見何でもないような書き間違い・言い間違い・読み違い・物忘れ等は精神現象の根幹に関わる重大な意味を告げていることがあるのではないか？というフロイトの講義の発端には、情報消費システムで他者の演じる様々な〈失策〉を日々刺激として与えられ、資本の運動を神とする拡散の力学にほんろうされ続けている心性に、あらためて内省を迫り振り向かせる原点性が感じられる。

私にとっては、書き間違い、殊に誤字は、たまにしか書かない文章の不可分な属性のようだ。簡単に分類してみると、「長い間正しい使い方だと思いこんで常用してきてしまったもの」「普段あまり使わないが文章の流れの中で何の違和感も無く使用してしまったもの」「あいまいな記憶を確認する気持ちの余裕がないまま使用~ 放置してしまったもの」などが上げられよう。無知と言ってしまえばそのとおりだし、読み返し調べなおす手間を避けた怠惰の結果と言われても二の口がきけない。苦笑しながら補いつつ読んでくれた知人もいたにちがいない。

廃業に追い込まれてだんだん減って行く関与先廻りの途中、美術館の駐車場に車を止めて、この草稿をメモし始めた時、「~ 入門」を「~ 入問」と誤記していることに後で気付いた。フロイト的に言えば、私は記入の段階で既に「入問」が間違いであることを知っているのに、なぜか相異なる二つの傾向（意向）の潜在的な葛藤があり、かき乱す傾向が生じて半ば忘我の状態で誤字を顕在させてしまっているということになろうか？あるいは、「入門」という視覚的な像を誘発する文字構成より、「問いに入る」という観念的な像から来る文字構成の方が意識の潜在的な流れからは必然的に現われ、規範意識の抑圧傾向を一時的に押しやる強度で浮上したためだというように。

似た例だが、「訪問」と書くべきところを「訪門」と逆のパターンで誤記していることがよくある。

このような誤字の訂正を含めて、単に規範に沿う形で行うだけでは本当に訂正していることにならないのではないかという疑問が生じる。誤字さえもしるしとして顕在化したがっているものの構造を、同時に、別の表現域に意識化する試みなしには、訂正とはただ一つの抑圧傾向に総体を屈服させることに過ぎないのではないか？このことは、心的病いや犯罪~ への対応についても言いうる。

松下昇は「同病」と自らを低くしつつ、対話や書簡の中で直接何度も、多すぎる私の誤字を指摘してくれた。その度に恥ずかしい思いもしたが、自覚できなかった難関や予兆についての得がたい示唆を受け取ることができた。

彼の読み違いが、本来書き手によって自覚的に表出されるべきであった〈無〉意識を取り出し救出した例もある。時の楔通信第〈10〉号に掲載されている訂正リストの第〈９〉号三九ページ下段左から六行目の項にはこう記されている。

『「招き」に」（＊　原文は「抜きに」であったが、この無意識の〈よみちがい〉のために、むしろ〈沖縄〉闘争の生命的なものが救抜されている、という原文筆者・永里氏からのありがたい指摘があった。）』

第〈９〉号に掲載された原文は、事件とは一見無縁な全く面識のない著明な沖縄学者に向け、自分らを被告人とする裁判に〈何事〉かの証人として招請したい旨を伝える手紙の下書だった。書きなぐった読みにく

いメモが松下の表現論によって復活させられる驚きとともに、言葉を発すること、記することの重さをあらためて実感させられた事例でもある。1969年４月28日の首都における街頭闘争で逮捕された後、権力の手中における一方的な裁判過程を〈闘争〉として展開する根拠を模索していた永里らは、遠くから響いてくる神戸大学闘争の足音を聞いていた。松下がそのメモに共感できる響きを聞いたとすれば、それは原文筆者の生硬な表現意識にもかかわらず反響していた、この〈よみちがい〉に象徴される彼自身の内在的な声~ 祈りであったろう。

ところで、松下は自らが関わった表現の校正~ 訂正作業を生涯的に繰り返している。しかし完全主義だったとか潔癖症だったとかいう印象は皆無である。先のフロイトの問題意識とも関連するが、校正~ 訂正のプロセスを通して、小さなしるしに示された重大な事物への巡礼を開始し続けたのだ。表現の開示方法においても決して効率性に流されなかった原則と共に、私たちの記憶の海を行く彼の手作業の連続性は、無類の誠実さ、という以上の問いを人の文明史の根幹に投げ入れている。彼が〈訂正〉について述べているところを聞こう。

『訂正について
この項では、集積する時の楔通信の持続的テーマや展開の予告ではなく、あえて、その対極にあるように感じられる〈訂正〉について記す。この通信の各号の最後には、つねに訂正リストが掲載されているが、これは、ペンによる表現が、未知の作業者の作業を含む全過程に共闘し切らないままで活字として複製化され包装して運ばれてくるまでにかかわる人たちに与えている〈疎外〉を自己批判的にとらえかえそうとする情念の深さで記されている。文章自体の誤記や誤字、校正段階で見落したミスプリントなどは、印刷完了後、配布段階をへてやっと視えてくることが多く、その一つ一つを発見する時に、前記の〈疎外〉のケース毎の特性のちがい~ 関連に注目するようにしている。校正以後にひらめく表現の追加もある。
この経過は、次の三つのヴィジョンと絶えず交差していることものべておこう。一つは、〈黒板〉や〈壁〉への直接表現や、話体での言葉は、時間をおいて訂正することが困難ないし不可能であるという表現位相内部の存在論ともいうべき感触である。もう一つは、裁判での記録は、たとえ自分の発言であっても、その訂正が（訴訟法上は異議申立の文書の提出~ 保存は認められているとはいえ）実質的に拒否され、訂正以前の問題として権力は権力内部の記録（者）しか信用していないという構造である。第三に、人間~ 社会の行動軌跡~ 様式の対象的〈訂正〉を可能にする組織論は何か、という問いである。この振幅で訂正という表現の意味を何度でも考えていくつもりである。最後にのべると、この通信の各表現や構成は確定した、完結したものではなく、今後、全ての共闘者と再検討しつつ、｛時の楔｝として情況~ 存在に突入させていくための素材を仮装しており、その方向での〈訂正〉を切望している。この場合、〈訂正〉概念は飛翔して、〈　〉の方法的原論の光を放ってくるであろうが。』　　（時の楔通信第〈９〉号－1984年2月）

概念集・２では、モンテーニュの『エセー』をとり上げながら先の三つのヴィジョンを次のように展開する。

『一一執筆~ 印刷~ 配付の全過程に関わろうとすること、全ての人がそうしうる情況をつくろうとすること、その試みが極めて困難であるが不可能でないことまでは視えてきた。訂正についても、具体的な作業を行う人の内的な意識を共有しつつ、この意識や労働対価の疎外形態の止揚をめざしている。
二一　〈黒板〉~ 〈壁〉への直接表現や話体の言葉も、それらが影響を及ぼした幻想性のエネルギーの量と質を、関わりをもつ全当事者が認識し解放していく度合で、より高次の水準へ〈訂正〉しうる。

権力の表現所有~ 訂正に関する構造は、基本的には権力構造の打倒~ 解体によって〈訂正〉しうるが、権力が無視しえない、別の〈同一〉表現をつくりだし対置する作業が、拘束されている表現を固定化させないためにも必要である。

人間~ 社会の行動軌跡~ 様式の対象的〈訂正〉の組織論の萌芽は、前記　、　を具体化する際に、モンテーニュのとった〈空虚〉への対し方の対極で〈　〉を媒介して出現しつつある。

三ーこの概念集、とくに　の〈訂正〉諭は、全ての共闘者が考え、再構成していくための素材を仮装している。』

（概念集・２　訂正－1989年9月）

「モンテーニュのとった〈空虚〉への対し方」とは、モンテーニュの訂正作業が、印刷技術~ 流行の限界等から生じる誤りの単なる抹消や訂正ではなく、原則として最終表現へ向かう追加であり、激動する情況から意志的に閉じ籠り文章を書いて公表するだけの〈行動〉にこめた姿勢や、確実な信念はありえないかも知れないという〈確実な〉思想にたどりつくまでに、彼が耐えた〈空虚〉の対象化作業の比喩として在ったことを指す。松下自身は何処にも不満を述べることなく、また閉じ籠ることもなく、〈空虚〉自体を応用して〈訂正〉概念を飛翔させ、〈　〉の方法的原論を示唆的に展開している。1992年５月には「五月三日の会通信」の、1994年６月には「時の楔通信」の各訂正リストを集約~ 作成~ 配付する。そういった作業の必然を感じながらも、彼だったらモンテーニュ以上にもっと別の興味あふれる表現の追加も可能だったのに、とつい思いがちだが、まさしくもっともっと可能であった自在な表現におけるのと同じ呼吸をこめて、あえてこのように提供されている〈　〉の素材の意味を何度でも考え直そう。

松下の晩年まで共闘してきた物理学者山浦氏が、７分冊に及ぶ~ 追悼資料集（抄）に続いて、前記の訂正リストを踏まえて既刊パンフ全冊を複製し、90年代最後のイブ、虚脱状態から立ち上がれない関係性に届けてくれたことを、先行する対象化作業の一例として噛みしめたい。

既存の誤りを撤回したり、無視したりすることが可能であるかのように振舞えるのは権力的行為においてのみだ。権力を持たない位置では、事跡の海面に現れた間違い＝失策行為の全ては何事かの貴重な信号であり、撤回ないし無視の対象ではなく、よりトータルな構造に包括していく作業に開かれている。

足下の、小さなしるしに示された重大な事物に巡礼する情念の深さを、各々の日常的な闘いの核心に奪回しうるかが問われているのである。〈　〉の方法的原論を引き継ぎ発展させる主体は遠くまで未出現であるけれども、何らかの〈失策〉に気付き〈訂正〉作業に踏み出すことはできる。模索の気配は絶え間なく動いており、相互に出会えない過渡性を生き延びていくだろう。

松下の複〈素〉数的な校正~ 訂正作業は経済的に決して報われることはなかった。しかし、現代文明から吐き出される〈ゴミ〉の総体を視野に、情況的清掃作業の一環としてその生活の根幹を豊かに支えた。それは、無駄なもの、取るに足りないものに命を吹き込む（石をパンに変える）労働や、関係性の〈調理〉に連結して、税務申告書の業種欄には〈　〉焼業、屋号には仮装被告団と記されている。

~ 2000年7月~　永里繁行